

神奈川大学・浙江大学 第9回日中学術交流シンポジウムの報告

人文学研究所所長 鈴木 陽一

日時：1999年11月8日（月）～11月9日（火）

会場：神奈川大学六角橋キャンパス

1. 浙江大学代表団の日程

11月7日（日）：浙江大学代表団訪日

11月8日（月）～9日（火）：シンポジウム（内容の詳細は別項）

11月9日（火）：全学歓迎レセプション

11月10日（水）～11日（木）：横浜及び都内各所における視察と資料収集

11月12日（金）：帰国

2. シンポジウム

11月8日（月）

午前（個別テーマ）

「日本における最初期のニーチェ受容の一側面」

鈴木修一（神奈川大学外国語学部教授）

「ラスキンとブルクハルトの捉えたイタリア・ルネサンス」

鳥越輝昭（神奈川大学外国語学部教授）

午後（集中テーマ：「中国人日本留学史研究の現段階」）

報告者

田 正平（浙江大学教育学部教授）

呂 順長（浙江大学日本文化研究所講師）

大里浩秋（神奈川大学外国語学部教授）

阿部 洋（福岡県立大学人間社会学部教授）

孫 安石（北海道大学法学部専任講師）

コメンテーター

蔭山雅博（専修大学教授）

高田幸男（明治大学助教授）

周 一川（お茶の水女子大学助手）

★なお、本シンポジウムは科研費の助成による、本学と浙江大学との共同研究プロジェクトとの共催で行われた。ここに記して関係各位に謝意を表する。

11月9日（火）

午前（個別テーマ）

「大工道具が文化を語る——道具を押すか引くか——」

西 和夫（神奈川大学工学部教授）

「古今文化交流範式の研究」

陳 村富（浙江大学哲学学部教授）

午後（個別テーマ）

「楊家將演義について」

廖 可斌（浙江大学人文学部教授）

「三百六十行：一九世紀中国の市井風情」

黄 時鑑（浙江大学歴史学部教授）

3. 今回のシンポジウムの総括と今後の展望について

11月9日シンポジウム終了後、本学人文学研究所運営委員及び所長と浙江大学日本文化研究所王守華副所長、王宝平副所長、呂順長講師とによって、シンポジウムを総括し、更に来年度以降の学術交流の進め方について議論を行った。

双方は今回のシンポジウムが、科研費プロジェクトとの共催という新機軸をも含めて成功したという点で意見が一致した。

今後については、双方が国際交流における平等互惠の原則を尊重しつつ、更に学術交流の内容を充実させていくことで意見の一致を見た。特にシンポジウムの形式については一層の工夫が必要であること、研究成果を発表する場としての『中日文化論叢』については、すでに一部での高い評価を得てはいるが、より多くの読者の獲得のために一段の努力を行うことで概ね合意をみた。今後はこの議論に基づいてそれぞれの機関及びそれぞれの大学の関係部署において検討を行い、来年度の具体的な交流計画の策定を開始することとした。

講演会要旨

会場：神奈川大学人文学研究所資料室（17号館 216 号室）

日時：1999 年 6 月 26 日（土）午後 2 時 30 分～5 時 30 分

講演者：廖 赤陽（武蔵野美術大学助教授）

演題：「東南アジアの金融・通貨危機と華人資本の動向—非制度的経済と制度的経済との接近—」

1997 年 7 月のアジア通貨・金融危機をきっかけに、華人資本に対する世評がポジからネガへと 180 度逆転したように見える。この問題には、単なる華人資本に対する評価にとどまらず、アジアの歴史認識、現状対応及び 21 世紀への行き先についての視点の相違が示されている。

華人資本の評価をめぐる論争は、この 20 年間における中国ないし東・東南アジアの経済発展に内在する伝統と現代、制度と非制度、組織と非組織、本土化とグローバル化、文化パターンと経済原理の間の軋轢と対話の焦点の一つでもある。筆者は、中国本土・台湾・香港ないしそれ以外の地域におけるチャイニーズを対象射程に収めて「華人」というカテゴリを広く捉えようと考えているが、これは、特定のエスニック経済集団としての華人ではなく、むしろ上述の対極的諸概念を整合・仲介する媒介項として、「華人」という分析の枠組を設定したい。なお、こうした対象の経営活動の構造的特徴をチャンドラー・モデルとの比較の視点から、ネットワーク的経営モデルとして位置づける。そして、時間軸にめぐった変化をみると、華人経済は三つの発展段階がみられる。つまり、1) 19 世紀中期までの広域市場圏の展開、2) 19 世紀後半～20 世紀 70 年代の国民国家への収斂、3) それ以降、再び国民経済の枠を相対化して

グローバル的展開をはかる。こうした過程において、1)・3) 期には、歴史的復帰ともいえるような相似点が検出される。

以上のような特徴を持つ華人資本は、今回の危機で株式の時価総額がほぼ半減するといった大きな打撃を受けた（香港・台湾・東南アジア上位 500 社のデータ）。この結果、危機以前の発展原動力となってきた人的ネットワークを軸とする「非制度」的な経営方式が、変容を迫られている。従来の商業領域だけではなく、製造業、なにかんづくハイテク産業、及び中国の伝統的文化資源に基づく独自の産業を育成して国際競争力を強化する動きが見られた。なお、これに対応して、国家政策による強力なサポーター体制も要求され、制度的経済との接点が求められた。しかし、これは、必ずしも華人経済が西洋型の経済スタイルに切り替えることを意味しているわけではなく、危機をきっかけに、より強靱対応体制をつくるために、華人は世界範囲での人的連携の強化をはかった。また、こうした華人ネットワークの強化は、同時に華人資本の国際化、或いは国際資本のボーダレス化の進展として捉えることができる。

華人経済の行き先は、安定したアジア地域秩序を保つことができるかどうか、また、世界経済に通用するアジア型の新しい資本主義スタイルが存在しうるかどうか、などの問題に関わっている。なお、これらの問題は、アジアの中の日本の位置づけにも大いに投影している。日本経済にとって、明治以来の国民国家・組織化・集団化への一極集中から脱却し、地域経済の視点からネットワーク的経営との接点をはかることが重要な課題であろう。

（文責：廖 赤陽）

1999 年度 人文学研究所活動報告

I. 講演会

6 月 18 日 (金) 「ことばと物語のインターフェイス」

池上嘉彦 (昭和女子大学教授)

6 月 26 日 (土) 「東南アジアの金融・通貨危機と華人資本の動向」

廖 赤陽 (武蔵野美術大学助教授)

7 月 7 日 (水) 「ヴェネツィアの近代化と三人の文学者——マリネッティ, ラスキン, レニエと機械性の問題」

鳥越輝昭 (神奈川大学外国語学部教授)

II. 『神奈川大学人文学研究叢書 (16)』刊行

『ロマン主義のヨーロッパ——人文学研究叢書 (16)』(勁草書房, 2000 年 2 月 5 日刊)

目次

まえがき

1. 闇と悪の系譜

——ドイツ・ロマン主義への一視角——伊坂 青司

2. イギリス・ロマン派の詩と絵画における想像力

——ブレイク, ワーズワス, ターナーとコンスタブル——岩崎豊太郎

3. イギリスのロマン主義とダンテ

——コウルリッジのダンテ観——奥田 宏子

4. スタール夫人におけるロマン主義理論の形成佐藤 夏生

5. ルソー, ロマン派, フェミニズム覚書松山 正男

6. ヴェネツィア, 未来派, 過去主義者

——マリネッティ, ラスキン, レニエと近代化——鳥越 輝昭

7. ロマンティシズムとピューリタニズムの相関性近藤 正栄

III. 浙江大学との学術交流

「第 9 回日中学術交流シンポジウム」の開催

日 時: 1999 年 11 月 8 日 (月) ~ 9 日 (火)

会 場: 神奈川大学 17 号館

11 月 8 日 (月)

開会の挨拶: 日高昭二 (神奈川大学外国語学部長)

鈴木陽一 (神奈川大学人文学研究所所長)

1. 鈴木修一 (神奈川大学外国語学部教授)

「日本における最初期のニーチェ受容の一側面」

2. 鳥越輝昭（神奈川大学外国語学部教授）

「ラスキンとブルクハルトの捉えたイタリア・ルネサンス」

【シンポジウム：中国人日本留学史研究の現段階】

開会の挨拶：山口建治（神奈川大学外国語学部教授）

大里浩秋（神奈川大学外国語学部教授）

「留学関係資料調査の中間報告」

阿部 洋（福岡県立大学人間社会学部教授）

「『対支文化事業』下の中国人留学生受け入れ問題」

田 正平（浙江大学教育学部教授）

「九十年代における中国近代留学史研究の概観」

呂 順長（浙江大学日本文化研究所講師）

「清末浙江籍の中国人日本留学生の研究概況」

孫 安石（北海道大学法学部専任講師）

「満州事変と日本在留中国留学生について—排日と取締りの構造」

コメンテーター

蔭山雅博（専修大学教授）

高田幸男（明治大学助教授）

周 一川（お茶の水女子大学助手）

討 論

11月9日（火）

1. 西 和夫（神奈川大学工学部教授）

「大工道具が文化を語る—道具を押すか引くか—」

2. 陳 村富（浙江大学哲学学部教授）

「古今文化交流範式の研究」

3. 廖 可斌（浙江大学人文学部教授）

「『楊家府世代忠勇演義志伝（簡稱『楊家府演義』）中人物形象的生成与該小説的演变」

4. 黄 時鑑（浙江大学歴史学部教授）

「三百六十行：一九世紀中国の市井風情」

全体の総括

次年度以降の学術交流のありかたについて討論

IV. 共同研究グループ

ロマン主義研究グループ

1. 研究会の開催：1999年7月7日（水）16:30～18:00

「ヴェネツィアの近代化と三人の文学者——マリネッティ、ラスキン、レニエと機械性の問題」

発表者：鳥越輝昭氏（本学外国語学部教授）

（この研究会は、1999年1月27日（水）に予定していたものであった。）

2. 合評会の開催：2000年2月に本研究グループによる神奈川大学人文学研究叢書『ロマン主義

のヨーロッパ』が刊行された後に、合評会を開く予定である。

(岩崎豊太郎)

日中関係史

研究会等の開催

- (1) 6月2日(水) 今年度活動についての打ち合せ。
- (2) 11月8日(月) 本学と浙江大学との学術交流シンポジウムの一部として、「中国人日本留学史研究の現段階シンポジウム」を主催した。内容の詳細は、本の形にまとめて近々紹介する予定である。

(大里浩秋)

文化のかたち

〈目標〉

1. 文化、文明の総合的な把握をめざす。
2. 「混沌」「混迷」の時代を迎え、21世紀、新「千年」にふさわしい「知の地平」をひらく。

〈活動〉

個々人の、あわせて、グループの研究活動を活性化していき、近い将来、成果を「叢書」にまとめたい。

- (1) 資料収集につとめつつ、(2) 外部から講師を招き、講演会・研究会を、催したりしてきた。

研究会・講演会の開催：1999年6月30日(水) 16:10～17:30

「日本の芸能—伝承と「かたち」

講師：赤坂治績氏(演劇評論家)

〈今後の展望〉

研究会・講演会などグループとしての活動とともに、個々人のフィールド・ワーク、取材・調査を活発にしていく。

(中本信幸)

比較研究：笑いのコスモロジー

1998年度(1999年3月)には、1995年以来の活動成果の一部が叢書『笑いのコスモロジー』として刊行された。本年度になって、同書の書評が幾つかの雑誌や新聞に掲載され、幸い、好意的な評価を得た。

ただし、長年にわたる本グループの研究成果は同書に収録された論文に尽きるものではない。何名かのメンバーは、本年度も『笑いのコスモロジー』に続く著書の公刊に向けた活動の継続を強く希望した。これを受けて活動の継続を鋭意検討したが、研究代表者の都合で計画を首尾良く実行に移すことが出来ず、結果的には、ニューズレターを幾度か発行するだけの不本意な活動に止まった。

(小馬 徹)

西洋文化の受容—訳語と思想—

本研究グループのメンバーは、言語、思想の研究者であり、主に近代を対象としている。本年度も前年に続き「明六雑誌」をテキストに講読会を中心に進めてきた。月1回のペース(合宿を含め14回)を申し合わせている。メンバー以外にも公開しており、院生などの参加もあった。

こうしたグループによる基礎資料の丁寧な講読は、若い時代はともかく、次第に時間に追われてな

かなかできなくなる。その意味で、お互いに有意義な研究会になった。とくに、言語の研究者と思想の研究者という取り合わせも議論を沸騰させた。途中から西洋史の研究者も参加して賑わっている。この講読会は、もう少し続けることになっている。また、これを足場に、グループ名である「西洋文化の受容—言語と思想」を叢書でまとめる計画（2002年）が進んでいる。

（高野繁男）

物語研究

〈活動報告〉

第1回共同研究会 1999年6月18日

講演者 池上嘉彦氏 演題 ≪ことばと物語のインターフェイス≫

物語共同研究会は、1999年に発足した訳ではないが、今回初めて、具体的活動の一つとして第一回研究会を開催した。初段階であるので、物語とその構成要素となる言語との関係を認識する目的で昭和女子大学教授池上嘉彦先生に認知学的そして記号論的立場から文学作品や伝承文学の分析方法を広範囲にわたって講義を拝聴した。人間の言葉による表現が物語を形成するのに認知的視点からみた時、各言語の持つ特性に基づいて如何に環境に依存しながら我々が〈語り〉を実現しているのかを更めて認識した研究会であった。

第2回共同研究会 1999年7月28日

今後の叢書の刊行に向けて具体的なテーマを話し合った。

日高昭二先生の提案による『想像する平安文学』（全10巻）の枠組構成を参考にしながら物語共同研究のテーマの大枠を相互に確認した。各自のテーマに沿って活動を始め来年度（2000年4月以降）会合を開くことを決めた。

編者は日高昭二。2002年度内に出版予定。原稿締切は2002年1月末日。

以上1999年度の会合活動は終了した。

（古岩井嘉蓉子）

ジェンダー・ポリティックスのゆくえ

1. 活動報告

本研究グループでは、来年度に叢書の刊行を実現したいと考えており、今年度は叢書の枠組みや各自の論文の内容等についてグループで検討しながら、メンバーが各自論文の構想づくりをすすめてきた。今年度中に叢書の原稿をまとめることをめざしている。

2. 研究会

(1) a. 日付：1999年5月31日

b. テーマ：ジョーン・W・スコット「ジェンダー再考」（『思想』1999年4月号）について

c. 発表者：笠間千浪

(2) a. 日付：1999年7月22日

b. テーマ：叢書の枠組みと各自の論文の構想について

（入江直子）

東南・東アジア社会の比較研究

1. 目的

本研究グループの目的は、近現代の東南アジアの諸社会に関する政治・経済・文化についての研究を行なうことにある。とくに神奈川大学の複数の学部にも所属する教員が、ネットワーク型の

研究組織をつくり、これを維持し発展させることをめざしている。

2. 活動内容

①「神大・東南アジア・フォーラム」と共同で、年数回にわたり研究会を開催し、適宜ニュースレターを発行する。研究会は原則として公開で行なう。

②会員による研究発表のほか、さまざまな地域を研究対象とする学内・学外の研究者を招聘し研究会を行なう。

本年度は3回の研究会を開催し、ニュースレターを2回刊行した。

3. 研究会

本年度に開催された研究会の日程・報告者・報告論題・出席者数および報告要旨は以下のとおりである。

第1回研究会（1999年6月26日）

報告者：廖 赤陽氏（武蔵野美術大学助教授）

論題：「東南アジアの金融・通貨危機と華人資本の動向—非制度的経済と制度的経済との接近—」

参加者：本学教員6名、本学大学院生2名、他大学大学院生1名、社会人2名（合計11名）。

報告要旨：（前掲、人文学研究所講演会要旨に同じ）

第2回研究会（1999年10月16日）

報告者：園田節子氏（東京大学大学院総合文化研究科博士課程在学）

論題：「19世紀後半南北アメリカへの華人の移出と初期駐米公使の研究」

参加者：本学教員5名。

報告要旨：

19世紀後半に清朝中国から南北アメリカに華人労働者が大量に移民した。こうした状況のなかで、清朝は、アメリカへの華工の移動への対応を迫られた。清朝は「遣使（常駐使節の派遣）」を日本の台湾出兵（1874）を契機に本格的に検討し始める。初代出使アメリカ大臣は1875年の上諭で任命、1878年の論旨で派遣が決まった。以後、職業外交官の技能を備えた伍廷芳が第6代出使アメリカ大臣に就く1896年までの出使アメリカ大臣の活動に焦点をあてると、積極的な「僑務（中国の政体が国内外で展開する在外華人に関する議論・政策・実施）」を展開する、といった特徴が見られた。

第3回研究会（2000年1月22日）

報告者：藤村是清氏（神奈川大学外国語学部非常勤講師）

論題：「海南島海関貿易移民報告 1876～1931年——ジャンク・移民・豚」

参加者：本学教員4名、他大学教員1名、社会人2名（合計7名）

報告要旨：

小なりとはいえ華僑の5大出身地の一たる中国海南島の移民と貿易に関する実証的報告である。骨格は、同島瓊州海関の各年次報告の貿易移民統計を收集整理して作成した同島海口港の貿易推移表と出入港者推移表の提示にある。また、海関統計における香港経由中国産品の「外国品」扱いの問題点。ジャンクの根強さと共に、東南アジア移民の往来と広東方面への豚移出とが並行的に進んでいることの意味も探究する。

（永野善子）

歴史とユートピア

〈活動報告〉

この共同研究は、壮大なテーマを掲げて恒常的な研究活動を続けてきたが、成果を世に問うに至

らなかった。今年度は具体的に成果を世に問う段階にきたと判断し、本学で新たに始まった共同研究学術奨励金に「歴史とユートピア思想の研究」というテーマで応募し、1999年、2000年度で計250万円の奨励金を支給して頂くこととなった。この計画には、中島三千男、寛 敏生両氏にも新しく参加をお願いした。

「歴史とユートピア思想の研究」の「共同研究の目的及び具体的テーマ」を以下に掲げておく。

人類史は理想世界を構想し、その実現に向けて歩む人間の歴史であった。特に宗教が万能であった近代以前とは異なって、理性と科学の時代となった近現代には、社会改革・科学的社会主義・ファシズム・ナチズム・天皇制国体運動・反帝反ファシズム運動・民族解放運動、それに自由主義等の、人類解放を標榜し、確信する諸々のユートピア思想・イデオロギーが、真の正義をめざし、全世界を巻き込んだ抗争をくりかえしてきた。しかし、その多くの構想と実践は挫折するか、あるいは予想もしなかった悲劇を生み出したのであった。何故か。こうした歴史の悲劇に関心のある、日本史、中国史、西洋史を専攻する研究者が、他の多くの歴史家の参加を得て、共同で近現代のユートピア思想・イデオロギーの再検討を行なわんとする。

上記の主旨に基づいて以下の活動を行なった。

①第1回共同合宿研究会（1999年8月25日～27日、2泊3日、山中湖にて）

報告

- 小島晋治 「歴史とユートピア—20世紀の一つの総括—」
- 佐々木潤之介 「ユートピア？ 解放幻想と蝦夷」
- 中村平八 「東洋経済史は可能か」
- 後藤 晃 「満州農業移民とユートピア」
- 的場昭弘 「マルクスとユートピア—歴史研究における偶然と必然—」
- 小林一美 「中国共産党粛清史の研究」
- 山田 徹 （討論参加）
- 岡島千幸 （討論参加）

②講演会の開催、1999年12月17日、セレストホールにて。

辻井 喬 「歴史とユートピアの消滅」

共同研究のテーマを外部から講師を招いて、学生・市民と共に考え、討論しようと計画した。この日の参加者は市民約100名、学生約80名であった。辻井 喬（本名、堤 清二）の講演は、現代の混迷する状況を批判し、日本の歴史と文化の再生をめざして、歴史とユートピアの関係性を問い、さらに現代文明に対する根本的疑問を提起する意欲的な講演であった。

③共同研究会 1999年12月17日夜、人文研にて

岡島千幸「17世紀イギリスの農民運動の心性について」

参加者 中村平八、後藤 晃、山田 徹、中島三千男、寛 敏生、小林一美の6名。

④第2回共同合宿研究会 2000年3月16～18日の2泊3日、伊東市にて開催。参加者は、上記の11名。全員報告。

共同研究の成果は、2000年9月までに、各自の研究の成果を原稿用紙50～60枚程度にまとめ、2001年の秋までに出版をと計画している。

（小林一美）

新購入主要文献解題

Slavery, Abolition and Emancipation: Writings in the British Romantic Period Peter Kitson and Debbie Lee eds.,
8 vols. (1999, Pickering & Chatto).
(『英国ロマン主義文学: 奴隷制度の
廃止と開放』全8巻)

英国では、ロマン主義時代において、奴隷制度が最も激しく批判された。ロマン派第一世代の文人たちは、英国の奴隷貿易だけでなく奴隷制度そのものの禁止を激しく訴えた。また、政治家、ジャーナリストたちは、奴隷問題、西インド諸島やアフリカの文化や社会について著述したり、論争したのであった。1807年には、英国の奴隷貿易が廃止され、さらに1833年には、奴隷制廃止法案が議会を通過して、植民地の奴隷解放が行なわれていった。

本著作集は、第1巻「黒人作家」、第2巻1部「奴隷制度廃止論者」(Edmund Burke, S. T. Coleridge などの著作)、第2巻2部「奴隷貿易支持」、第3巻「奴隷開放」(人道主義の貴族 William Wilberforce, Thomas Clarkson などの廃止論)、第4巻「詩」(William Blake, Robert Burns, S. T. Coleridge, Hannah More, Robert Southey, William Wordsworth などの詩)、第5巻「戯曲」、第6巻「小説」(Maria Edgeworth, Mary Sherwood などの小説)、第7巻「医学と西インド諸島奴隷貿易」(英国下院議会の文書など)、第8巻「人種: 索引」(政治ジャーナリスト William Cobbet, スコットランドの法律家・哲学者 H. H. Kames, 人類学者 James C. Prichard などの著作)の8巻で構成されている。各巻には、序文と著作ごとに頭注及び編集上の注釈が付いている。

本書は、当時の英国の革新的な文学者、政治家、ジャーナリストたちが奴隷貿易・奴隷制度に対してどのように反対したのかを、詩、戯曲、小説という文学だけでなく、政治、経済、哲学、歴史、

医学など広い領域に及んでよく伝えている貴重な資料である。
(岩崎豊太郎記)

Aesthetics: Sources in the 18th Century
John Valdimir Price ed., 8 vols.
(1998, Thoemmes Press).
(『18世紀美学文献集成』全8巻)

このコレクションでは、知名度が高く入手しやすいテキストほどには知られていないが、同じように重要な著作をまとめている。また、今日入手が困難な稀覯な文献も含まれている。

本書には、18世紀哲学の権威 John Valdimir Price による、序文、および各巻の著者とテキストについての注釈が付けられている。編集者の Price によると、'aesthetics' という言葉は、18世紀に出版された英語の書籍のタイトルには見られないが、美、趣味、崇高、想像力のような、18世紀の美学の研究にとって、他の基本的な概念、少なくとも言葉は、頻出しているという (Vol. 1, vi)。

本書には、18世紀の美学理論家が、美、想像力、趣味、詩、音楽、崇高などの意義を明確にするために取り組んだ著作が集められている。次に各巻の収録内容を、すべてではないが記したい。

Volume 1: Jonathan Richardson, *Two Discourses* (1719)

Volume 2: Zachary Mayne, *Two Dissertations concerning Sense and Imagination* (1728).

Volume 3: George Stubbes, *A Dialogue on Beauty. In the Manner of Plato* (1731).

: Joseph Spence, *Crito; or a Dialogue on Beauty* (1752).

Volume 4: John Gilbert Cooper, *Letters concerning Taste* (1755).

Volume 5: Dannel Webb, *Observations on the*

Correspondence between Poetry and Music
(1769).

Volume 6: James Usher, *Clio: or, A Discourse on Taste. Addressed to a Young Lady* (1809).

Volume 7: Richard Burnaby Greene, *Critical Essays... Observations on the Sublime of Longinus, etc.* (1770).

Volume 8: William Jackson, *The Four Ages; Together with Essays on Various Subjects* (1798).

本集成は、ヒューム、シャフツベリ、パーク、ホーム、ワーズワス、コウルリッジなどの研究家にとってもきわめて興味深い文献と思われる。

(岩崎豊太郎記)

『清代秘密結社档案輯印』(全10冊)

黎 青主編 華東師範大学出版社

1999年1月刊

中国における秘密結社の活動は長い歴史を有するが、清代になると各種の結社が勃興して活発な動きを示し、200余年の清朝統治に重大な影響を及ぼしたので、支配者としてはそれへの対策、鎮圧に頭を悩ますことになった。そこで、各地に展開する秘密結社の動きに関する調査報告やそれへの対応について清朝と地方官とのやりとりの記録が多量に生み出されたのである。清朝宮廷内に残されたそれらの資料(中国語で「档案」という)は、1925年来各種の雑誌や資料集の中で公表されてきたが、いずれも限られた時間、あるいは事件別の資料であったため、清代のそれらの活動を通覧するには不都合であった。

この点を克服して、清代17世紀中葉から20世紀初頭までの全期間の関連資料を収録したのが、この全10冊の資料集である。具体的には、白蓮教、羅教、黃天教等の宗教結社、及び天地会、三合会、小刀会等の幫会を網羅していて、清代の秘密結社の状況を理解するのに大変便利な内容となっている。

(大里浩秋記)

『F. V. ディキンズ全集』全7巻

*Collected Works of Frederick Victor
Dickins* Edition Synapse

F. V. ディキンズ(1838~1915)の名前を知っている日本人は少ないが、明治維新时期に海軍軍医として来日し、退官後横浜で弁護士として活躍し、のちにロンドン大学の事務総長になった英国人の日本研究家で、アーネスト・サトウ、チェンバレン、カール・フローレンツなどと親交があった。彼が維新の二年前に出版した『百人一首』の翻訳は百人一首の最初の完訳となり、同時に日本文学の英訳第一号となった。ディキンズはまた、『富嶽百景』その他の葛飾北斎に関する著述によって、北斎を学術研究の対象として最初にとり上げた人でもあった。帰国後ロンドンで知り合った南方熊楠の協力を得て日本文学の翻訳に専念し、『万葉集』、『竹取物語』、謡曲『高砂』、『方丈記』、『忠臣蔵』など多数の日本文学を翻訳し、さらに彼の日本文学研究の集大成ともいえるべき二巻本『古代中世日本語テキスト』(Primitive and Mediaeval Japanese Texts)を出版した。

今回のディキンズ全集は彼の著述のすべてを集めて復刻集成したもので、英国の科学雑誌 *Nature* に掲載されたモースの大森貝塚発見への反論のほか、学術誌に掲載された多数の論文も収録されている。ディキンズの業績は文学だけでなく、法律と医療の分野にもわたり、1870年代の横浜の外国人コミュニティの一員としての活躍も重要である。この全集によって彼の業績の全容が明らかになり、彼の日本への貢献を再評価することができることは意義が深い。(秋山勇造記)

『ブラッドショー 初期英国鉄道地図』復刻版

19世紀末イギリスのランカシャーで始まった産業革命は、近代資本主義社会が確立され、そのグローバル化が推進される契機として、その重要性をいくら強調してもし過ぎるということはないが、この産業革命を影で支え、その成功に大きく貢献したインフラストラクチャとして看過しえないのが近代的な交通・運輸体系の開発整備であ

る。それはまず 1790 年代の運河建設ブームに始まり、1820 年代以降の鉄道建設ブームによって完成する。本鉄道地図の作成者ブラッドショー (1801~1853) は、まさにこれらのインフラ開発整備期に産業革命の中心地マンチェスターに生れ、生涯を草創期の交通・運輸体系の情報蒐集と情報発信 (出版) につとめた功労者である。

さて、今回購入した本復刻地図 (本の友社、1997) は、表題は鉄道となっているけれども、運河をも含む次の 4 種類の地図が収録されている。

1. ランカシャー・ヨーク・ダービー・チェスター運河地図 (1829)
2. ミッドランド運河・可航河川・鉄道地図 (1829)
3. イギリス南部運河・可航河川・鉄道地図 (1830)
4. イギリス鉄道地図 (1839)
5. イギリス鉄道地図 (1849~50)

いずれももともとは折畳み式の大判の地図であるが、これらの原本の折目に沿って、原則として 2 マスずつを原寸で収録し、全体として A3 版 116 頁にまとめられている。彩色も、現代の複製技術を最大限に生かして、原図に忠実に再現されており、19 世紀初期のイングランドの交通・運輸インフラの開発整備過程を認識するということだけにとどまらず、当時のイングランドの景観をイメージする点でも重要な手がかりを与えてくれる。

(伊藤喜栄記)

『台湾日々新報』マイクロフィルム版

『台湾日々新報』は 1898 (明治 31) 年 5 月 1 日、同年 3 月に後藤新平民政局長を引き連れて、第四代の台湾総督になったばかりの児玉源太郎の肝煎りで創刊されたものである。当時、台湾には

有力紙として『台湾新報』(1896 年創刊) と『台湾日報』(1897 年創刊) があったが、前者は薩摩系、後者は長州系という立場ではげしくいがみあっていた。

児玉は、植民地統治の実をあげるためには、何よりも世論の誘導が不可欠と考えて、両紙の合併に乗り出し、新たに『台湾日々新報』を創刊せしめたのである。以後、同紙は、総督府の手厚い庇護をうけた日刊の「御用紙」として、1944 (昭和 19) 年 3 月 31 日に廃刊するまで、約半世紀の間刊行せられ、日本による台湾の植民地統治に大きな役割を果たした。

「内地」(日本) より多くの著名な学者を招致して編集に当たらせ、法令規則、時事、社会問題、さらには風俗・生活形態、台湾の歴史・文化などを克明に記したその紙面は、日本による台湾の植民地支配の実態をつぶさに物語る貴重な基本資料であり、第一級の歴史史料である。

これまで、この『台湾日々新報』は極めて限られた所にしか所蔵されていなかったが、この度、ゆまに書房により、マイクロフィルム版として、四期にわけて世に出されることになった。第一期明治編には『台湾日々新報』の創刊号から 1912 (大正元) 年 12 月 31 日までが収められているが、併せて、『台湾日々新報』の前身ともいえるべき『台湾新報』も創刊号から廃刊にいたる号まで収められている。この明治編・全 70 リールは図書館に納められている。人文学研究所に納められているのは、続刊の第二期大正編 (1913 年 1 月から 1926 年 12 月)、第三期昭和編 (上) (1927 年 1 月から 1935 年 12 月)、第四期昭和編 (下) (1936 年 1 月から 1944 年 3 月) の全 271 リールである。

(中島三千男記)

所員の自著紹介

『プーシキン 1799-1999』

プーシキン生誕 200 周年記念祭実行委員編
日本ユーラシア協会, 1999 年 6 月 6 日 (48 頁)

ロシアの国民詩人プーシキン (1799~1837) の生誕 200 周年にあたり, 本国ロシアはもとより国際的に多彩な催しが企画された。小野理子, 浅岡宣彦, 奥村剋三, 法橋和彦, 田辺佐保子, 杉野ゆり, 米川哲夫, 箕浦達二, 井桁貞義, 中本信幸, 藤沼 貴, 沼野充義, 川端香男里, 寺西春雄, 小野光子, マルガリータ・富田, V・カザケーヴィチ, 藻利佳彦ら内外の研究者 18 名が寄稿した文集で, プーシキンの生涯, 詩, 小説, 劇作品に論及し, 世界文学, 日本文学, ロシア演劇, 音楽などのかかわりについても触れている。巻末には略年譜, 翻訳書・参考文献解題も付され, 写真・イラストも豊富な本書 (A4 版) は, 小冊子ながら, 楽しいプーシキン・ミニ百科である。

(中本信幸)

『トルストイと現代』

日本社会文学会編
日本社会文学会地球交流局, 1999 年 6 月 15 日 (42 頁)

本冊子は, 1998 年 8 月 17 日, ロシアの文豪トルストイの生地ヤースナヤ・ポリャーナの国立トルストイ博物館で開かれた最初の日露文学シンポジウム「トルストイと現代」でのパネリストの報告とトルストイ館長の挨拶とを収めている。ウラジーミル・トルストイ「トルストイ思想の新発信地ヤースナヤ・ポリャーナ」, 中村青史「トルストイと横井小楠・徳富蘆花」, 中本信幸「トルストイと泉 鏡花」, 西田 勝「トルストイと田岡嶺雲の文明批評」, 平岡敏夫「石川啄木とトルストイの日露戦争論」, 井上理恵「トルストイと小山内薫・島

村抱月・杉本良吉」, イリーナ・V・ニケリーナ「トルストイの日本像」, タチャーナ・N・アルハングリスカヤ「トルストイとブッダー仏教」, キム・レイホ「東洋諸国におけるトルストイ像」など多数で鋭い問題提起, 最新の研究成果が盛り込まれている。

(中本信幸)

『ホセ・マルティ選集』第 3 巻

後藤政子 (監修・訳)

日本経済評論社, 1999 年 6 月 30 日 (418 頁)

世界的に知られる (と言っても日本だけ例外かもしれないが) ラテンアメリカの思想家ホセ・マルティの選集 (全 3 巻) の最終巻である。企画以来 3 年目にしようやく第 3 巻を上梓することができた (第 1 巻の文学編は別の訳者の手で 98 年末に刊行した)。

「詩人, 小説家, 劇作家ジャーナリスト, 教育者…マルティ」と称されるように, いかに 19 世紀の啓蒙思想家らしく, マルティの活動はきわめて多岐にわたる。だが, 日本ではもっぱらキューバ独立の父として知られ, 1959 年のキューバ革命成功とともに紹介されている。確かにそうした見方は決して間違いではなく, 今日のキューバではフィデル・カストロはもちろんのこと国民に深く敬愛されており, キューバ革命の思想的原点はマルティにある。また, ソ連消滅後の政治経済体制の転換 (いわゆる自由化) の基軸もそこにある。

しかし, 今回, 日本での選集刊行が決まり, あらためてその作品 (きわめて膨大なものであり, 各巻 600 ページ, 全 27 巻に及ぶ) を読み直してみても, 単に「キューバ独立の父」で済ませてしまうにはあまりにも惜しいものがあることに気づいた。少年期に植民地政府に投獄されてから 1895 年に戦場で斃れるまでの 42 年の生涯は文字どおり独立実現に捧げられたものだが, その背後には今日においてもなお普遍的価値をもつ独自の思想

があったのである。

マルティは人間の本性を自由であるにとらえ、自由の実現を人間の義務であると同時に名誉であるとした。だからこそ生涯を独立運動に捧げたのであったが、興味深いのは、たとえば、彼は黒人の解放を最優先課題のひとつとするなど下層大衆の復権を唱えたが、にもかかわらず、ある人種が他の人種の優位に立つことを拒否し、「人種問題というものは存在しない」としていたことである。それはなぜかということだが、そこにマルティの思想の独自性がある。その深さはここでは簡単に示すことはできない。

この第3巻を構成するにあたっては1880年にスペインから米国に亡命してきたわずか27歳の小柄なやせ細った青年が、一方では10年戦争といわれる1865年の第1次独立戦争の超大物指導者や上層階級、他方ではフロリダ半島の下層の移民労働者など内外の多様なキューバ人を統一して独立戦争実現にまで導き、戦場で斃れるまでの作品をとりあげ、その思想を明らかにするという手法をとった。日本ではあまり知られない新しいマルティ像を打ち出せたのではないかと思っている。

『プログレッシブ英語逆引き辞典』

国広哲弥・堀内克明共編

小学館、1999年7月（1313頁）

本辞典は普通の逆引き辞典と異なり、単語の語末部分を切り取り、それをアルファベット順に並べたものである。各項目内の単語の配列もアルファベット順にしてあるので、普通の逆引き辞典より検索がはるかに楽になっている。正確には「語末引き辞典」と呼ぶべきものである。形の上では同じ語末でも、発音がちがったり、語源がちがったりすると別項目扱いにしてある。単なる機械的に配列した辞典でない点も大きな特色である。語末によってはその単語のアクセントの位置がほぼ決まっているものが少なくないので、その点にも触れてある。語末要素が形を変えて語頭に付くこともあるので、その時の形の変化にも触れ

てある。おそらく世界的に見てもユニークな辞典であると言えよう。

『皇帝カルロスの悲劇—ハプスブルク帝国の継承—』

藤田一成著

平凡社（平凡社選書 No. 199）、1999年11月25日（310頁）

近代ヨーロッパ史上、君主国は君主の死をもって支配権の継承がなされるのが通例であり、生前の引退は極めて珍しい。この稀有な事例の一つに、16世紀前半のヨーロッパに君臨したカルロス5世がある。しかも、彼はいくつもの国の君主を兼ねていたために、その各々について、自らの手で順次退位の手続きを取ることになる。

本書は、まず引退を決意するまでの複雑な紆余曲折を解き起こすことから始まり、次いで引退のハイライトともいえる、ネーデルラントの君主としてブルゴーニュ公爵位からの華々しい退位式典の展開の過程を追いながら、その中で語られた演説の内容を分析することによって、異例の生前退位にいたる背景を明らかにする。

引退したこの皇帝は、その後、ブリュッセルを発って海路北スペインに渡り、カスティーリャを縦断するという苦労の多い旅を続けて、その余生を送ることになるスペインの山深い修道院に3カ月の月日をかけてようやく到着することができた。本書では、その間の旅の過程と、ここで死去するまでの19カ月に及ぶ隠遁生活の様子を、カルロス自身やその側近と、スペイン当局者との間で交わされた400通を超える書簡を解読し、分析することによって描写しているが、そのお陰で一般的にありがちな定型的で完璧な君主像ではなく等身大の人間性を垣間見ることができた。そして、最後にカルロスの引退とその死がもつ歴史的意味を考察している。

時あたかも、西暦2000年はカルロスの生誕500周年にあたり、ヨーロッパ各地でさまざまなイベントが予定されており、日本でも彼の存在が認知されるようにささやかでも貢献できればと思

う。

『中間言語分析：英語冠詞習得の軌跡』

水野光晴著

開拓社（平成 11 年度科学研究費補助出版），

2000 年 2 月 20 日（290 頁）

本書は、言語対照分析と誤答分析の欠点を補うために筆者が体系化した中間言語分析について述べたものである。言語対照分析は、学習者のエラーを排除すべきものとして、ネガティブに捉えていたのに対して、誤答分析はエラーを第 2 言語習得に必然的なものとして、ポジティブに評価した。しかし、研究の対象に関しては、両者は静的なエラーの断面を分析するに留まっており、L2 習得に介入する様々な項目のダイナミックなプロセスは追求されなかった。また、研究の視点も、両アプローチでは、研究者の一方的な視点で行な

われた。

他方、中間言語分析では、研究者と学習者の双方向の視点を重視する。すなわち、中間言語分析は、ある研究対象項目の動態を、中間言語発達の全過程にわたる実験データにもとづいて追跡し、その原因を明らかにして、外国語教育の改善を目指す病理学的アプローチである。しかも、この研究で得られる結果は具体的であり、一般的である。したがって、この研究は、(i) 教室でのエラーの訂正、(ii) 文法説明の提示、(iii) 言語材料とカリキュラム編成、という三つのカテゴリーに関して要領を得たものである。

筆者はそのモデルケースとして、本実験と 5 回の追試を合わせて約 2800 名の日本人を対象に英語冠詞に関する中間言語分析を行ない、言語情報処理理論と認知意味論の観点から、英語冠詞の選択原理を図式化している。

執筆者紹介

伊	藤	喜	栄	本学外国語学部教授
中	村	浩	平	本学外国語学部教授
鳥	越	輝	昭	本学外国語学部教授
尹		健	次	本学外国語学部教授
国	広	哲	弥	本学外国語学部教授

編集後記

今号より新常任委員会の編集になりました。予定どおり刊行の運びとなり、ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。ささやかな改革の第一歩として、今号より、研究論文のキーワードを記載することになりました。今後も皆様の声を反映して、少しずつ改革を進めていきたいと考えております。忌憚のないご意見をお聞かせいただければ幸いです。

(Y)

人文学研究所

所 長
国 際 交 流
所 報
会 計 ・ 講 演
図 書
共同研究・叢書

鈴 木 陽 一
後 藤 政 子
山 口 ヨ シ 子
大 西 勝 也
西 野 清 治
寺 沢 正 晴

人文学研究所報 No. 33

二〇〇〇年三月一日 印刷
二〇〇〇年三月五日 発行

頒価 一、〇〇〇円

編集人兼
横浜市神奈川区六角橋三二七
神奈川大学人文学研究所

代表者 鈴木陽一

電話〇四五(四八)五六二(代表)
東京都新宿区高田馬場三一八
印刷所
株式会社 国際文献印刷社
電話〇三三(三六)九七四一